

双龍戯珠型螭首からみた文化交渉

——朝鮮・中国の例を中心に——

篠原啓方

East Asian Steles and Cultural Interaction:
An Analysis on Korean and Chinese Stele Head
of Double Dragons with the Wish Full-filling Jewel

SHINOHARA Hirokata

Double dragons with the wish full-filling jewel 双龍戯珠, is a style of the head of East Asian steles. This paper presents this dragon head style was produced in Qufu 曲阜 during Yuan period, and Korean (Joseon) missions got information of this style back to Korea and produced it in the 15th century.

keyword: stele, East Asia, dragon head, jewel, Korea (Joseon), China (Yuan, Ming)

キーワード：碑、東アジア、螭首、龍、珠、朝鮮、中国

はじめに

東アジアの石碑の中には、類似の型式を共有しつつ、国境を越えて多様に展開するものがある。その一つが、「双龍戯珠」と呼ばれる型式（意匠）の螭首である。この双龍戯珠型螭首は、15世紀中葉に朝鮮において登場して以降、朝鮮における螭首の主流となる。筆者はこの意匠の起源と登場背景について関心を抱いてきたが、2019年に中国で行った調査において、この疑問の手がかりとなる資料を得た。本稿ではその調査例を紹介し、朝鮮の螭首との比較を通じ、両者の関係について検討する¹⁾。なお本稿の成果の一部は「2019年度関西大学学術研究員研究費」によるものである。

1) 本稿に掲載された写真は、すべて筆者の撮影によるものである。

I 朝鮮と中国の双龍戯珠型螭首

1. 「双龍戯珠」の意匠と呼称

「双龍戯珠」とは、中央の宝珠（如意珠とされることもある）と、宝珠を取りまく2頭の龍で構成される意匠を指す語である。双龍は二龍、戯珠は争珠とも呼ばれ、双龍対向珠・両龍対向珠と表現されることもある。戯と争の字義はかなり異なるものであるが、実際に意匠から見分けるのは容易でなく、使用例の多くは慣用的なもののように思われる。本稿の目的もまた、用語に沿った厳密な判別ではなく、意匠を総合的に比較・検討することにある。したがって本稿では便宜上、上述の意匠を「双龍戯珠」の語で統一し、考察することにする。

左右の龍が中央で向かい合う構図は、中国においては秦代の空心磚や、漢代の画像石に見られ、韓国においては環頭大刀の柄頭裝飾が挙げられる。螭首においては宝珠の両脇に配されることが多いが、龍の姿は一様ではない。

2. 朝鮮半島における双龍戯珠型螭首

朝鮮半島における螭首を伴う碑は7世紀に登場するが、その意匠は、複数の龍が螭首の両端で垂下するもの（本稿では垂下型と呼称しておく）であり、これは南北朝期から唐にかけて確立する中国の碑を模したものであった。9世紀に入ると、二龍と珠が表現された螭首を有する高僧碑が新羅において登場し、高麗にも受け継がれるが（図1）、やがて衰退していく。



図1 螭首。左は河東双碓寺真鑑禪師塔碑（885）、中央は寧越興寧寺址澄暁大師塔碑（944）、右は驪州高達寺址元宗大師塔碑（975）

表1 14～15世紀における朝鮮の螭首の変化

番号	名 称	紀 年	螭首型式	備 考
①	大天台宗弘慈国統碑（額） ²⁾	高麗末期か 1377	垂下	図2左
②	楊州檜巖寺址禪覺王師碑	(高麗禑王3)	垂下	宝物第387号
③	演福寺塔重創碑	1394 (朝鮮太祖3)	垂下	ソウル市有形文化財第348号 図2中央
④	九里太祖健元陵神道碑	1409 (朝鮮太宗9)	垂下	宝物第1803号 図3左
⑤	ソウル太宗献陵神道碑	1424 (朝鮮世宗6)	垂下	宝物第1804号 図3右
⑥	ソウル世宗英陵神道碑	1452 (朝鮮文宗2)	双龍戯珠	世宗の神道碑。宝物第1805号
⑦	良孝安公墓碑（額）	1466 (朝鮮世祖12)	双龍戯珠	安孟聃の墓碑。ソウル市有形文化財第50号（墓所と一括）
⑧	円覚寺址大円覚寺碑	1471 (朝鮮成宗2)	双龍戯珠	宝物第3号

【凡例】

①と⑦以外は指定文化財の名称に従った。

14世紀になると再び垂下型が登場する（表1）。上部でわだかまる（蟠結）身体や、宝珠から立ちのぼる瑞気が桃形をなす表現などが共通しており、これらは唐や新羅の復古型式ではなく、元代の碑の影響を受けたものである（図2、3）³⁾。



図2 螭首。左は表1-①、中央は表1-③、右は大元太師泰安武穆王神道之碑銘（山東岱廟、1317年）

2) 碑の主人公である弘慈国統についてチョン・ソンジョン（鄭善宗）は、無畏国統（丁午）と同一人物であるとし、立碑年を1325年前後とする（『高麗末 石碑의 変化에 对하여』『文化史学』11・12・13、594～595頁）。

3) 関野貞は表1の③について「螭首は純然たる唐式で新羅統一時代の太宗武烈王碑の者に似てゐる。又亀趺は寧ろ古拙に過ぎてゐるが是れ亦麗碑と頗る性質を異にしている」と述べたが（『朝鮮の建築と芸術』、岩波書店、1941、188頁）、修正が必要である。キム・ミンギユ（金玫圭）は類例として、中国北京の法源寺聖旨碑（1308）を挙げている（『朝鮮時代陵墓碑研究』、東国大学校博士学位論文、2019、24頁）。



図3 螭首。左は表1-④、右は表1-⑤

この垂下型は朝鮮時代初期まで続くが、⑤以降ほぼ見られなくなる。これと入れ替わるようにして登場するのが双龍戯珠型螭首である(図4)。現存する螭首の中で最も早い双龍戯珠型は⑥(ソウル世宗英陵神道碑、1452、図4左)であるが、新羅から高麗にかけて見られた「二龍と宝珠が表現された螭首」とは異なり、14世紀に登場した垂下型螭首の要素を受け継いでいる(Ⅱ章参照)。⑤と⑥には30年ほどの開きがあり、この期間に立てられた墓碑や神道碑が数例あるが、螭首を有するものは見られない。以上の点から、朝鮮時代の双龍戯珠型螭首は、おおよそ⑤と⑥の間、すなわち15世紀中葉以前に登場し、次第に垂下型に取って代わっていったものと考えられる。



図4 螭首。左は表1-⑥、中央は表1-⑦、右は表1-⑧

3. 中国の双龍戯珠型螭首

朝鮮の双龍戯珠型螭首の成立を考える上で、筆者は中国山東省、特に曲阜の調査において比較対象となり得る資料を得た。これを整理すると表2の通りになる。

表2 山東曲阜地域の双龍戯珠型螭首を有する碑

番号	西暦	年号	所在	名 称	彫刻技法	備 考
①	1307	大徳11	孔廟	大成至聖文宣王詔書（額）	高浮彫	
②	1331	至順2	顔廟	大元加封岱（亮）国復聖公制詞碑（額）	高浮彫	
③	1334	元統2	顔廟	大元加封杞国文裕公制詞碑（額）	高浮彫	
④	1339	至元5	孔廟	大元敕修曲阜宣聖廟碑（額）	高浮彫	
⑤	1349	至正9	顔廟	大元勅賜先師浚国復聖公新廟碑銘（額）	高浮彫	
⑥	1441	正統6	顔廟	大明勅賜兗国復聖公新廟碑（額）	額内陽刻	
⑦	1456	景泰7	孔林	奉天誥命（額）	額内陽刻	
⑧	1458	天順2	孔林	故襲封衍聖公孔公神道碑銘（額）	額内陽刻	
⑨	1468	成化4	孔廟	御製孔子廟碑（額）	額内陽刻	
⑩	1476	成化12	孔林	奉天誥命碑か（額に文字なし）	高浮彫	
⑪	1503	弘治16 （重立）	孔廟	御制孔子廟碑（額）	額内陽刻	永楽15年（1417）初立
⑫	1503	弘治16 （重立）	孔廟	大明詔旨（額）	額内陽刻	洪武4年（1371）初立
⑬	1504	弘治17	孔廟	御製重建孔子廟碑（額）	額内陽刻	
⑭	1507	正徳2	孔林	六十一代襲封衍聖公南谿先生墓（碑身）	額内陽刻	
⑮	1509	正徳4	顔廟	御製顔子廟重修碑記（額）	額内陽刻	

【凡例】

- 表は年代順とした。
- 調査例は他にもあるが、本稿の趣旨に合わせ、立碑年代が確実で16世紀初頭までの例のみを挙げた。
- 名称は文献によって様々であり、指定文化財などの公式なものがない。本稿では碑文に登場する名称に従った。

表には15基を挙げている。山東の調査では、元代から民国期に至る事例を確認したが、双龍戯珠型の螭首を有する碑は少数であり、中国における螭首の主流は垂下型である。筆者の知る限りでは、中国の双龍戯珠型螭首は、元代以前、すなわち唐宋、遼、金代には存在せず、山東以外では、西安、北京、瀋陽において明清時代の例を数例確認したに過ぎない。ただそうした双龍戯珠型螭首が、表2のように山東、特に曲阜において一定数確認された点には、注目する必要がある。

表2にしたがい、まず年代から見ていきたい。最も早いのが①（大徳11年、1307）であり、14、15、16世紀にそれぞれ5例ずつが確認できる。これを王朝別に見ると、元代が5例、明代が10例である。限られた資料ではあるが、双龍戯珠型螭首が元代に入って本格的に登場し、定着していった可能性が想定される。

所在については、筆者が調査した孔廟、孔林、顔廟のみが挙げられている。調査した碑は3地域に散在する碑のほんの一部に過ぎず、これ以外にも双龍戯珠型螭首を有する碑は存在すると考えるべきであろう。ただ曲阜における双龍戯珠型螭首が一過性のものでなく、元代以降、同地域と深い関わりを持ちながら、長年にわたって製作され続けたことは確かである。

名称からは、碑の性格をうかがうことができる。双龍戯珠型螭首を有する碑は、諸神、孔子・顔回とその一族への封号（①、②、③、⑦、⑩、⑫）、孔子や顔回の廟の建築や修理に関するもの（④、⑤、⑥、⑨、⑪、⑬、⑮）、そして孔家の墓碑（⑧、⑭）などがある。このように双龍戯珠型螭首を有する碑は、皇帝の制・勅・誥命・詔など重要な内容を含んだものであり、筆者の調査の限りで言えば明清の帝陵に

においても確認される⁴⁾。立碑の目的や碑文の性格に伴う差が存在する可能性はあるが⁵⁾、双龍戯珠型螭首を有する碑の格が垂下型螭首より劣っているわけではなく、両者は地位や身分によって使い分けられてはいない。

最後は技法についてである。双龍戯珠型螭首の製作技法には大きく2種類がある。一つは龍の身体を高浮彫で表現したもの（図5）で、もう一つは螭首の面を縁取りし（額）、その中に陽刻で表現したもの（図6）。特徴としては、意匠の構成において、高浮彫式が螭首の4面をすべて用いるのに対し、額内陽刻式は碑陽と碑陰の2面のみである点、高浮彫式は複数の龍がわだかまる（蟠結）状態であるのに対し、額内陽刻式は2頭が完全に分離している点である。いずれも精緻な作品であるが、高浮彫式が立体的かつ複雑と言えよう。



図5 螭首。左が表2-①、右が表2-③



図6 螭首。左が表2-⑥、右が表2-⑩

この2つの技法において注目されるのは、時期の差である。高浮彫式は元代に集中しており、明代のものは表2の⑩を除き額内陽刻式である。ただ⑩（図7）は、第61代衍聖公である孔弘泰の妻孫氏を衍

4) 明の昭陵・長陵・定陵、清の北陵の帝廟諡石碑（明樓碑）で確認した。ただし技法においては、いずれも額陽刻式（後述）に該当する。

5) 調査した明清の帝陵碑においては、神道碑（神功聖德碑）は垂下型、帝廟諡石碑（明樓碑）は双龍戯珠型（いずれも額内陽刻式）であった。

聖公夫人に襲封する制誥を刻んだ重要な碑文であるにもかかわらず、螭首に題が刻まれていない点が不自然である。⑩をはじめ、双龍戯珠型螭首は碑身と螭首が別途に製作されたものが多く、⑩の碑身と螭首は本来のセットではない可能性もある⁶⁾。いずれにせよ、この2種類の技法が、元と明という王朝を境に大きく変化したことは指摘できよう。



図7 螭首。表2-⑩

以上、曲阜の双龍戯珠型螭首は、筆者の調査における質的・量的な制約はあるものの、おおよそ元代以降に事例が増えていくこと、14世紀から16世紀の曲阜における螭首型式の一つであること、その技法には大きく2種類があり、おおよそ元と明という王朝で技法が変化することが理解できた。

朝鮮との比較で見ると、朝鮮の双龍戯珠型螭首が15世紀前半以降に登場するのに対し、中国における調査例は14世紀に登場する。また技法面から見ると、朝鮮の双龍戯珠型螭首は高浮彫式であり、元代の螭首（高浮彫式）に近い。次章では、両者を比較・検討し、両者の関係について考える。

II 双龍戯珠型（高浮彫式）の構成と比較

表2に挙げた高浮彫式の螭首は、碑陽と碑陰に2頭ずつ、計4頭の龍が配されており、尾も4つあることが確認されるが、頭部から尾に至る身体の構成が複雑で、即座には把握しがたい。これについて、表2-②（大元加封兗国復聖公制詞碑）の螭首を例に検討していく（図8、碑陽側）。龍の身体は、A（頭から前足にかけての部分）→B（Aに続く胴部）→C（Bに続き、後ろ足が表現された胴部）→D（最後の尾の部分）の4つに区分することができる。

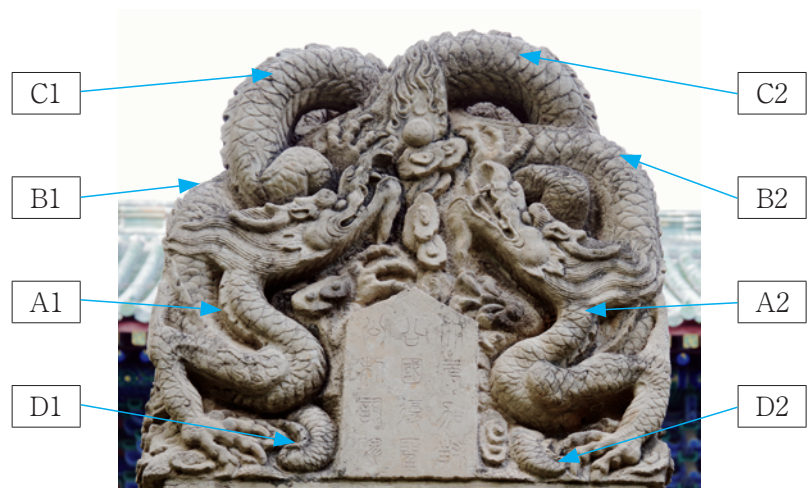


図8 表2-②の螭首（碑陽）

6) この螭首は本来⑩とは無関係であったが、⑩の螭首が何らかの理由で壊れ、その代用としてはめ込まれた可能性も想定される。

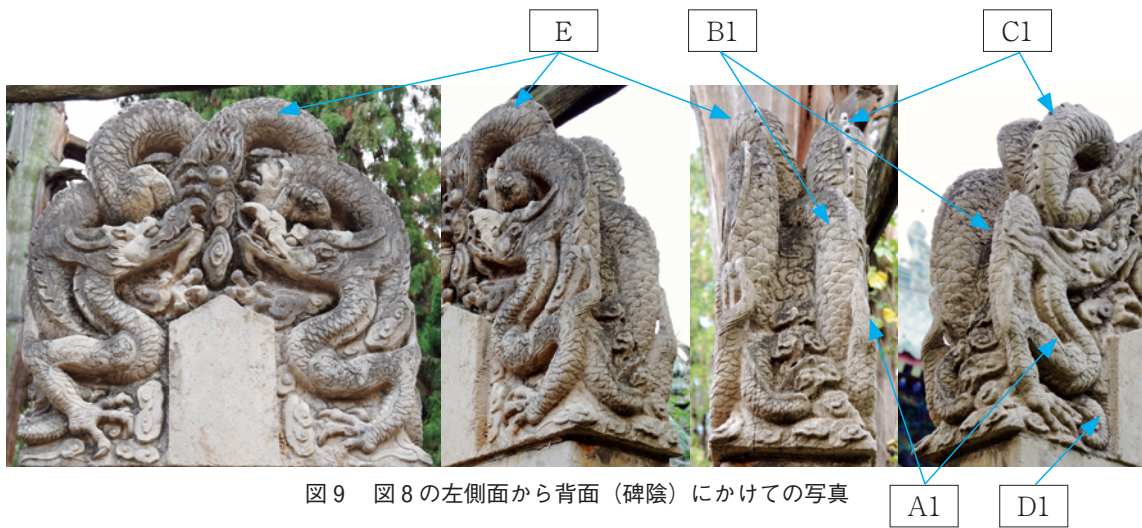


図9 図8の左側面から背面（碑陰）にかけての写真

碑陽の左龍（A1）は、碑額左部中段の横で身体を曲げて上部に伸びあがるが、背鱗の近接具合から、B1とつながることは確実である。右側のA2とB2も同様である。

次はBとCの関係である。B1はC1の下を通りすぎてC2とつながるように見える（図8）が、側面と合わせて検証する。図9（右から2番目）を見ると、B1はC1の左を通してEとつながるようにも見える。だがEは、碑陰（図9の左端）のCに該当する部分で、碑陽のC2と同様、碑陰の左側から尾に向かって伸びてくるため、B1とはつながらない。また図9（右から2番目）を見ると、Eは左寄り、B1は右寄りであるから、Eが碑陰側へ、B1が碑陽側に向かうことが分かる。以上の点から、当初の予想通り、B1はC1の下を通りすぎてC2に続くを見て問題ない。また図8のB2の左に見える足はB2から出たものではなく、その背後を通るC2の足（後足）であることが分かる。さらにこの後足から、C2が碑陽側に向かって出てきていることが分かる。C2はA2に隠れて見えなくなるが、最終的に碑陽側の尾（D2）へと続くことになる。

このように、図8の左龍はA1→B1→C2→D2からなり、これは龍の身体が同じ面（碑陽側）の左端から右端までつながっていることを意味する。これと対をなす右龍はA2→B2→C1→D1となり、反対の面（碑陰）の螭首も、同様の構成と見て問題ないであろう。

以下では、上述のような考察に基づき、左右の龍身を色分けしたトレース図を示しつつ、双龍戯珠型（高浮雕式）螭首の特徴を比較・検討していく。なお叙述にあたっては便宜上、曲阜のものを曲阜型、朝鮮のものを朝鮮型と略称する。

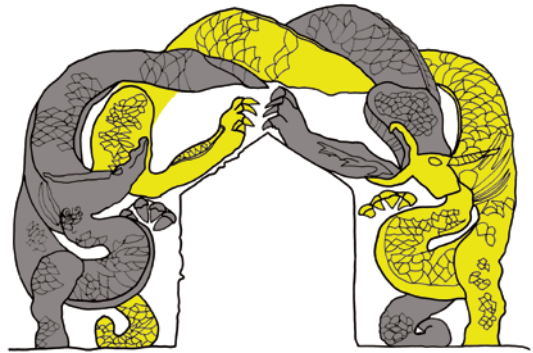
トレースのもとになる写真は、斜め下から撮影したもので身体や意匠の比例が正確ではない。またトレース図は身体表現以外の要素はほぼ排除しているが、色分けに際しては境界線の曖昧な部分もある。こうした問題点はあるものの、身体の構成や部位の特徴をおおよそ理解する上では問題ないと判断される。

1. 曲阜型

①大成至聖文宣王詔書

（1307、大徳11、図5左のトレース）

頭部は碑額の上方向けられており、前足は両足（4本）、後足は片方のみ（2本）である。螭首下部に伸びる前足は指先まで表現されず、途中で終わっている。長い後足は、垂下型の構図をほぼ踏襲している。後足の周囲には宝珠が確認できないが、碑陰にはほぼ同じ構図で宝珠が表現されており、碑陽も宝珠を想定した構図であろうと考えられる。尾は碑額下部の両脇にある。



②大元加封台（亮）国復聖公制詞碑

（1331、至順2、図8のトレース）

頭部は宝珠に向けられている。前足は両足（4本）、後足は片足のみ（2本）である。碑額の右上にある右龍の右前足は、宝珠ではなく雲をつかんでいる。鼻先にある後足は、①とは異なり短く、宝珠に近接するが触れてはいない。宝珠は小ぶりで、瑞気が宝珠全体から立ちのぼっている。尾は碑額下部の両脇にある。



③大元加封杞国文裕公制詞碑

（1334、元統2、図5右のトレース）

頭部は宝珠に向けられている。前足は両足、後足は片足のみである。前足は碑額上部で握りしめた状態だが、その中に持物は表現されていない。後足は②と同様に短く、宝珠に近接するが宝珠に触れてはいない。宝珠は小ぶりで、宝珠より小さな瑞気が1本立ちのぼり、途中で数本に分かれている。尾は螭首両端の下部で、外巻きで表現されている。



④大元敕修曲阜宣聖廟碑（1339、至元5）



頭部は宝珠に向けられている。前足は両足、後足は片足のみである。宝珠の真下にある2本の前足は、雲をつかんでいる。後足は短く、宝珠に近接するが触れてはいない。宝珠は小ぶりで、全体から瑞気が立ちのぼっている。尾は碑額下部の両脇にある。

⑤大元勅賜先師澆国復聖公新廟碑銘（1349、至正9）

右龍の頭部と左前足の指が1本破損している。右龍の頭部は側面ではなく斜め上から見た構図で、頭部は宝珠に向けられている。前足は両足、後足は片足のみである。碑額中央の上にある前足は、一方が雲を、もう一方が碑額をつかんでいる。宝珠に近接する短い後足は②～⑤に共通するが、これらはもう一方の龍の身体をつかんでいるものと思われる。宝珠は小ぶりで、宝珠よりも小さな瑞気が1本立ちのぼり、途中で数本に分かれている。尾は螭首両端の下部に、外向きに巻いた状態で表現されている。



ここまで5つの曲阜型について見てきたが⁷⁾、やや特殊であるのが①である。①と②～⑤を比較すると、①は顔が小さい点、身体の蟠結が螭首頂部でなめらかな弧をなさない点、左龍の後足（右龍の頭上）と胴体の接合部が不自然である点などの特徴を持ち、技術や構図の面で稚拙さが目立つ。これに対し②～⑤の龍は、細部は異なるが全体としては同じ構図であり、相対的に洗練された印象を受ける。このよう

7) ⑩は年代がはっきりせず（I章参照）、その意匠も②から⑤の説明の範囲に収まるものであるため省略した。

に曲阜型の螭首は、①と②～⑤という2種類に大別される。

その違いを考えるにあたって、まず注目されるのは年代である。①と②には24年の開きがあるのに対し、②と③の間隔は3年、③と④は4年と短く、④と⑤（10年）も①と②ほどの開きはない。前述した②～⑤の共通性を考えると、①から②に至る期間に、双龍戯珠（高浮彫式）の構図がある程度確立し、②以降定着したことをうかがわせる。

①と②の関係でもう一つ指摘しておくべきことは、後足の表現に見られるように、①が以前（垂下型）の構図を踏襲しているのに対し、②～⑤はそれらを逸脱している点である。つまり①は垂下型から双龍戯珠型へと変化する初期段階のものであり、一定の歳月を経て②の構図を確立していったということになる。①に始まり、②に至ってほぼ確立し、③～⑤へと展開する様相は、完成した意匠が別の地域から持ち込まれたのではなく、この曲阜地域で創案され、試行錯誤を経て確立していったことを示唆するものであろう。

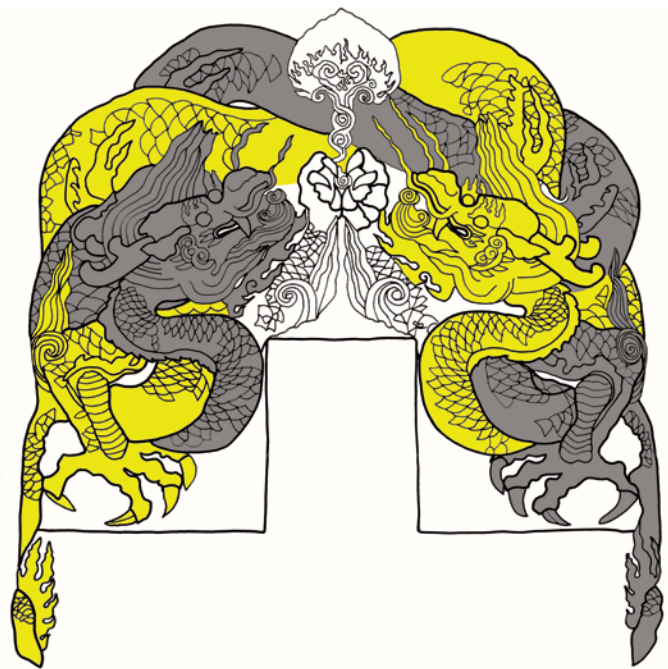
2. 朝鮮型

大円覚寺碑（1471、図4右のトレース）⁸⁾

頭部は宝珠もしくはその上方に向けられている。足は左右の龍のものを合わせて4本が表現されており、碑額の上方に伸びる足は宝珠をつかみ、もう一方の足は螭首左右の下部にある。宝珠の中央からは渦を巻いた瑞気が1本立ちのぼり、その途中で数本に分かれつつ、螭首の頂部で桃形をなす。蟠結の構図や瑞気の形状は、元碑に起源を持ち、高麗末期から登場する垂下型を受け継いだものである。尾は螭首左右の下部からさらに垂下する。

全体的に、龍の身体や装飾が精緻であるが⁹⁾、気になる点がないわけではない。その一つが足の表現である。曲阜型が前足4本、

後足2本であるのに対し、朝鮮型は全部で4本である。数の違いもさることながら、注目すべきは足の構図である。ここでは螭首の右側を例に検討していく。まず螭首右下に伸びる大ぶりの足¹⁰⁾は、右龍の



8) 本来なら最も早期の作であるソウル世宗英陵神道碑と比較すべきだが、摩耗が進んでおり、また碑閣に遮られて正面の写真を撮ることができなかった。ただ双龍戯珠の構図においては大円覚寺碑に酷似していることから、同碑（碑陰）の図を用いることにした。

9) 関野貞は「螭首亀趺は唐宋碑より脱化し来りて而も固有の特色を示し、技巧の精練なる実に李朝碑中の白眉である」と賞賛する（前掲書、189頁）

10) この足の構図にも腑に落ちない点がある。関節の曲がる方向や下腿の文様から見ればこれは左脚である。一方、足

頭から項^{うなじ}にかけて確認される背鱗の背後から出ており、この足の付け根が項の背後に隠れていることが分かる。一方、右龍の上体は左龍の尾の背後を通過して螭首右端の中段あたりに出てくるが、この上体と螭首右下に伸びる足の付け根は近接しておらず、この足が右龍の前足ではないことは確実である。

次に宝珠をつかむ足、すなわち右龍上体の背後から上に伸びる足は、その位置から右龍の右前足にも見えるが、同じ上体の露出部分には対をなすべき左前足が表現されていないため構図として不完全であり、前足とは見なしがたい。一方、この足は、右龍上体と蟠結する左龍の「後足」である可能性もある。実際に「後足で宝珠をつかむ」構図は垂下型螭首の伝統であり、中国においては南北朝期から清に至るまで確認され¹¹⁾、垂下型螭首の蟠結方法を継承した朝鮮型のそれが後足であっても不自然ではない。またこの足の一部は右龍の頭や髭の背後に隠れており、本来の太さを考慮すると、この足の付け根と、螭首右下に伸びる足の付け根が、ほぼ対称的な位置で左龍の下体に近接しており、後足と見なして何の問題もない。螭首全体の構図はほぼ左右対称であるから、右龍上体の左右にあるのが左龍の後足だとすると、その反対側、すなわち左龍上体の左右にあるのは右龍の後足ということになる。

このように朝鮮型の4本の足はすべて後足である可能性が高いのであるが、気になるのは前足の存在である。図を見る限り、右龍上体の一部は左龍との蟠結によって隠れているが、その部分に前足が存在する可能性はさほど高くなく、最初から前足が想定されていなかった可能性すらある。だがそもそも前足のない（足が2本しかない）龍という意匠が成立し得るのかという点にも疑問が残る。螭首左右の下部に伸びる足はともかく、「宝珠をつかむ足」が前後いずれの足であるのか（あるいは、どちらと考えて表現したのか）については、現時点では断定を避けておきたい。いずれにせよ、この螭首が技巧を尽くした秀作であるにもかかわらず、構図において不自然な点是否定できない。同碑が「写実表現はいかにも未熟の感ある表現」¹²⁾と評されるのは、こうした点に起因するのであろうか。

3. 両者の比較

曲阜型と朝鮮型は、「上部中央の宝珠」、「左右から上を向く双龍」、「螭首左右の下部に伸びる足」、「蟠結」という4つの構図に共通点がある。ただ一方で朝鮮型には、蟠結の方法、宝珠の瑞気、宝珠をつかむ足、たてがみの方向、頭部の2本の角、垂下する尾、そして碑身と一体型である点など、細部において曲阜型とは異なる点も多く見られる。また両者には製作年代の差が大きく、曲阜型が製作された14世紀前半代に高麗がこれを受容した痕跡はない（前述）。このように曲阜型が朝鮮型に影響を及ぼしたとは言いがたく、両者は無関係のようにも思われるが、必ずしもそうとは言い切れない。

その理由の一つは、双龍戯珠の構図が、必ずしも曲阜型や朝鮮型と同じものにはならない点である。本稿では螭首の例のみを挙げているが、双龍戯珠は、絵画をはじめ、他の材料や作品を含めると、その構図は多岐にわたっている。曲阜の螭首にも、複数の龍が蟠結する高浮彫式と、2頭が完全に分離した

の指は、左の3本と右の1本に分けられており、右の1本は第1指（足の親指）のようであるが、これは右足の表現に近い。つまり左脚に右足が付いたような構図ということになる。

11) 本稿で紹介した垂下型螭首なども含まれる。

12) 鄭永鎬「円覚寺碑」『李朝美術（韓国美術3）』、講談社、317頁

額内陽刻式がある。また2頭の龍が中央の宝珠に向き合う構図は、朝鮮型の登場以前となる新羅や高麗の碑に見られるが、朝鮮型は曲阜型の構図に近いものとなっている。つまり朝鮮型は、意図的に曲阜型に近いものを取捨選択したということになる。

もう一つは、特に高浮彫式の持つ蟠結と左右下部に伸びる足が螭首特有の表現であると考えられる点である。曲阜の額内陽刻式は、龍を小さく、その周囲に多くの雲を表現し、景観の中に龍を位置づけており、絵画に近い印象を受けるが、本稿でいう曲阜型（浮彫式）は龍の身体が作品全体を占め、雲は小さな余白を埋める素材に過ぎない。これは龍をできる限り大きく表現するための工夫であり、龍頭（および身体）を大きく表現し、身体を蟠結させることで螭首という狭い空間に収めているのである。絵画であれば、龍を大きく表現するためには材料（布や紙）を大型化すれば解決するが、曲阜型と朝鮮型は、螭首という制限された空間を蟠結した身体で埋め尽くし、龍の大型化を図ったのである。これらを考慮すると、朝鮮型と曲阜型に共通する双龍戯珠の特徴は偶然の産物ではなく、朝鮮型の製作時に曲阜型のような「螭首の意匠」に関する情報を得ていたことを示すと考えるのが妥当であろう。

以上、曲阜型と朝鮮型を比較し、その特徴について検討した。朝鮮型は曲阜型の模倣とは言えないが、曲阜型のような、螭首に用いられる双龍戯珠の情報を得たと考えられる。一方、朝鮮型は技術的には優れた作品であるが、不自然な構図が見られた。次章では、そうした構図の原因と、朝鮮型の登場背景について考える。

Ⅲ 螭首から見た朝鮮と中国の文化交渉

朝鮮型が曲阜型のような螭首の情報を得たにもかかわらず、不自然な構図を残すことになった原因とは何であろうか。以下では「下部に伸びる足」の比較を通じ検討してみたい。

「螭首下部に伸びる足」については、足の位置や大きさ、表現方法などが似ており、朝鮮型が曲阜型のような螭首の情報を参考にした可能性は高い。にもかかわらず、朝鮮型は曲阜型のような前足ではなく、後足として表現された。こうした違いは、蟠結の方法とも深くかかわっているようである。

曲阜型と朝鮮型は「上部中央の宝珠」と「左右から上を向く双龍」の構図において、双龍の頭が中央に寄せられて宝珠の方向を見上げ、上体は左右の下部で弧を描きつつ螭首の左右下部から上部へと伸びあがる点で共通しているが、朝鮮型の場合、龍の上体が弧を描く際、上体と下体を蟠結させている。一方、曲阜型は上体が弧を描く際、龍身を蟠結させずに伸びあがる。

曲阜型は、龍の上体が伸びあがる構図において、もう一方の龍の下体が、この上体の背後に完全に隠れてしまうため、上体が表現しやすくなり、左右の下部に前足を大きく表現することが可能となる。だが朝鮮型の場合、蟠結によって上体の一部をもう一方の龍の下体が隠してしまうことで、上体の表現が制限されてしまう。朝鮮型の図案の作者に、この下部に伸びる足を前足として表現する意図があったのかどうかは不明であるが、蟠結を左右下部のほぼ中央に配した結果、前足を表現することが困難になったのは確かである。

この蟠結もまた曲阜型と朝鮮型の共通点であるが、その方法においては両者に差が見られる。前述したように、朝鮮型は垂下型の蟠結を継承したが、曲阜型の蟠結は垂下型とは異なる。龍の身体がもう一

方の龍の身体に隠れる回数は、曲阜型が2回であるのに対し、朝鮮型は4回と多い。その回数が多いほど複雑になり、表現にも制限が加わることになる。龍の身体が螭首の頂点に達する位置は、曲阜型が龍の頭部とは反対側（右龍であれば螭首の左上）であるのに対し、朝鮮型は頭部と同じ側（右龍であれば螭首の右上）にある。龍の身体の太さも、曲阜型が細身で交差する部分には隙間が生じているのに対し、朝鮮型の龍身は太く、密着した状態で交差（蟠結）する。このように、曲阜型は蟠結を減らすことで相対的に龍の表現にゆとりを持たせ、朝鮮型は蟠結を維持することで表現が制限され、結果として足の構図が不自然なまま残されたのである。

このように両者を比較すると、朝鮮型の意匠は未熟・稚拙と言わざるを得ないのであるが、曲阜型も双龍戯珠を取り入れた初期段階（曲阜型①）においては完成度が低く、一定期間を経て意匠が確立した経緯があった点を見逃してはならない。そもそも垂下型が長期にわたって維持されてきたのはその完成度の高さゆえであり、部分的な改変によって即座に完成度の高いものができるとは限らない。こうした曲阜型の展開過程に鑑みれば、朝鮮型が双龍戯珠の受容初期において完成度が低いものであるのは当然の結果とも言える。その後の朝鮮型において説明しておくなら、不自然な足の構図は、2本の前足として明確に表現される例が増えていく¹³⁾。このように、受容から変容に至る過程が両者に共通しつつ、異なる展開を見せている点は、非常に興味深い。

最後に、朝鮮型が登場する背景について考えておきたい。朝鮮はなぜこの時期に朝鮮型、つまり双龍戯珠という意匠を螭首に取り入れたのであろうか。これを明確に示す記録は見いだせなかったが、初期の朝鮮型の碑が、国家の主導で製作された点には注目すべきである。現存する朝鮮型の碑として最も早い世宗神道碑（表1-⑥）は、文宗の命によって世宗の陵に立てられ¹⁴⁾、大円覚寺碑（表1-⑧）は、世祖が命じた円覚寺と石塔の建立、そして完成後の法会の経緯を記す目的で立てられた¹⁵⁾。この二つの碑には約20年の開きがあるが、螭首の意匠に大きな変化が見られない¹⁶⁾ ことから、国家はこの意匠を重要視していたものと判断される。その理由として、精緻な身体表現や芸術性の高さなどが挙げられるが、国家が関与する以上、その象徴性、あるいは政策や統治理念との関連性も考慮すべきであろう。

朝鮮の統治理念として第一に挙げられるのが儒教である。朝鮮の建国は、高麗末期の士大夫層の成長と深くかかわっている。士大夫らは仏教を批判し、儒教（朱子学）を基本理念とした統治を志向したが、これらの勢力と結びついて政権を掌握し、王位に就いたのが李成桂（太祖）であった。朝鮮の建国後も、儒教を統治理念の礎とする方針には変化がなく、太祖から太宗、そして世宗代に至る15世紀半ばまでの朝鮮は、法制や礼制、教育、社会習俗など、多方面にかけて儒教文化の定着を図った。太宗代の儀礼詳定所は、儀礼や諸制度の研究・制定を行った代表的な機関である。儒教儀礼においては、唐宋の古礼や明の礼制の受容にとどまらず、朝鮮における旧習あるいは仏教儀礼を儒教化する作業も進められ、世宗代にはそれらがさらに促進された。『世宗実録』付録の五礼は、それまで研究・蓄積されてきた国家儀礼

13) 蟠結や宝珠の意匠も多様化していくが、これについてはあらためて論じたい。

14) 『文宗実録』巻5、文宗元年1月11日申亥および巻12、文宗2年2月20日甲申、『世祖実録』巻3、世祖2年（1456）1月25乙未

15) 大円覚寺碑文による。

16) 安孟聃の墓碑（表1の⑦）の螭首は構図がくずれているが、基本的に世宗神道碑のそれを模倣したものである。

をまとめたものである。

世宗神道碑は、そうした社会の動きの中で登場する。神道碑とは陵墓に立てられる碑の一つであり、高麗末期から存在したことが文献に伝わるが、現存最古の作品は太祖健元陵の神道碑（表1の④）である。神道碑は官品の高い者のみが立てることを許されるもので、儒教の実践とはやや性格を異にするが、高麗末期における新進士大夫層の登場と軌を一にしていることから見ても、これらが儒教文化の一環と理解されていたことはほぼ間違いない。

神道碑の螭首は、少なくとも太宗神道碑（1424）までは垂下型であった。この垂下型は高麗末期の高僧碑の螭首として登場し、朝鮮の建国後も演福寺塔重創碑（1394）、太祖神道碑（1409）、そして太宗神道碑まで維持される（表1を参照）。言うなれば、仏教文化の一部として始まった碑（螭首）の型式が、儒教国家を志向する朝鮮においても踏襲されていたのである。そのような経緯を持つ碑が、礼制整備の過程において儒教化の対象となった可能性は十分にある。

ならば、双龍戯珠には、儒教的な意味や、それを象徴する要素があると言えるのであろうか。『世宗実録』治葬（巻134、五礼、凶礼）は「當石室正南山麓、營丁字閣…其東建碑閣」と碑閣に言及するのみで、碑の規模や型式に関する内容は無い。儀礼全体において螭首の型式はさほど重要でなかったとも思われ、厳格な規定が設けられなかったとしても不思議ではない。ただ双龍戯珠の情報と関連して『朝鮮王朝実録』には興味深い記録がある。

丁巳。命詳定积奠儀、且致祭於箕子。礼曹参議許稠啓曰、臣嘗朝上国、過闕里見积奠儀、與今国家所用之儀、互有同異、請加考証…（『太宗実録』巻21、太宗11年4月27日、1411年）

朝鮮の許稠なる人物が、かつて上国（明）に朝見した際、闕里（曲阜）に立ち寄って积奠儀を見たが、朝鮮における积奠儀とは異なる点が多いため、朝鮮の积奠儀に考証を加えて定めるよう上奏したところ、太宗の許可を得たという内容である。許稠の朝見とは、1407年の秋から1408年の春にかけ、明への賀正使に随行した時のことを指す。進表使は当時の王世子であった李禔（讓寧大君）で、この年39歳となった許稠は書状官の一人に任命され、随行期間中の出来事を記録し、王に報告する義務を負うことになった。許稠は麗末鮮初の著名な政治家・学者であった権近の弟子であり、太宗代から世宗代にかけて特に礼制にかかわる職を歴任した¹⁷⁾。

許稠が太宗に道中の報告をするのは当然の義務であるが、この曲阜訪問には特別な意味があろう。朝鮮のみならず、中国の周辺国から派遣された使者は通常、指定されたルートを外れることは許可されておらず、また希望すれば見学を許されるわけでもない。曲阜への訪問が実現したのは、明の都がまだ南京にあり、朝鮮の漢城と南京とを往来するルート上に闕里（曲阜）が近接していたため¹⁸⁾であり、さ

17) 許稠については、韓亨周論文（「許稠와 太宗～世宗代 国家儀礼의 整備」『民族文化研究』44、2006）および姜文植論文（「太宗～世宗代 許稠의 礼制 整備와 礼認識」『震旦学報』105、2008）を参照。

18) 当時の朝鮮の漢城と南京を往来したルートについては、キム・ボジョン（김보정）「麗末鮮初 対明 南京使行路의 分析과 影響」『地域과 歴史』27、釜慶歴史研究所、2010に詳しい。

らに王世子が賀正使として訪れたことに対する明側の配慮であった可能性もある。いずれにせよ曲阜の訪問は、儒教を国是とする朝鮮の官僚にとって、恐らくは二度とないであろう特別な機会であり、実際に許稠は帰国後、折に触れて曲阜での見聞に基づき礼制に関する意見を上奏している。

上記の記録によれば、許稠は「積奠儀を見た」という。積奠儀とは、孔子や儒教の聖賢を祀る儀礼のことで、孔廟で挙行されたと考えられるから、少なくとも彼は曲阜の孔廟に立てられた碑を実見する機会があった。曲阜型の多くは元代の作であり、機会と時間が与えられていれば、許稠はさらに多くの曲阜型を有する碑を見ることができたであろう。

本稿で述べる曲阜型の螭首は、曲阜以外にも存在する可能性があり、朝鮮にその情報が伝わった経路についても多くの可能性が指摘できよう。だが曲阜型がこの地で独自に展開した経緯や、儒教文化として曲阜が持つ象徴性、情報を得る契機などを考慮すると、朝鮮側が情報を入手した機会は、この曲阜訪問において他には考えがたい。

許稠が曲阜型にどの程度関心を寄せたのかは不明であり、またその情報は許稠以外の随員によって得られた可能性もある。いずれにせよ、この曲阜型は中国では主流となり得なかったが、朝鮮において新たな地位を獲得し、変容しつつ朝鮮の主たる型式として定着するのである。

おわりに

以上、15世紀中葉を前後して登場する朝鮮の双龍戯珠型螭首をめぐり、中国と朝鮮の螭首を比較・検討しつつ、その文化交渉の一断面について論じてきた。元代の双龍戯珠型螭首に関する情報が、曲阜を訪問した朝鮮の使節団によって朝鮮に伝わり、朝鮮の双龍戯珠型螭首の成立に寄与したことを、型式の比較・検討を通じて指摘した。

本稿では螭首の型式を中心に述べてきたが、螭首の情報伝達の経緯や、碑の製作や立碑をめぐる朝鮮内の議論について、文献史料などからさらに詳しく知る必要がある。今後の課題としたい。